随想 《オレ様化する人たち》について

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

演歌歌手の吉幾三氏が三月二十一日までにＹｏｕＴｕｂｅチャンネルを更新。飛行機内で「横柄な態度」で振る舞っていたという国会議員の実名を明かして苦言を呈した。

吉氏の訴えは昨年五月「私は怒ってます！」と題した動画で、飛行機のファーストクラスに座っていたという国会議員について「言葉の遣い方とかが乱暴でよ」と、「横柄な態度」で客室乗務員らに接していたと告発。「国民を代表して出てる人は横着な態度はやめてもらいたい」というものである。最初の段階では国会議員の名前について公表を控えていたが今回アップした動画では、現役のキャビンアテンダント（ＣＡ）から寄せられたとする手紙を公開するかたちで、当該議員が自民党の長谷川岳参院議員（五三）だと公表した。

同ＣＡの手紙では、長谷川氏が搭乗する際には事前に航空会社から注意事項が伝達されるといい、「長谷川さまご自身も周りに有権者の方々がいらっしゃるという意識はないようで、非常に高圧的な言い方をされます。到着が遅れることに関しては、鬼の首を取ったような言い方でクレームをされます」「長谷川さまが気づきと態度を改めていただくきっかけになってほしいと思います」等と書かれているとした。

この情報公開に対して件（くだん）の長谷川議員が、（彼にしては）精一杯の反論を公開しているが、それはこの随想とは別件である（長谷川氏の反論が稚拙で恥の上塗りをしていることは触れておこう）。

《オレ様化する人たち》とタイトルされた本がある（注１）。サブタイトルに、あなたの隣の傲慢症候群、ある。実は、この電子書籍はタイトルに引かれて発行当初にダウンロードしていたものの、ざっと見てあまり興が乗らなかったため、放置していたものである。しかし、先に述べた吉幾三氏と長谷川氏の報道を見て、ふと読み返したくなった。

傲慢症候群とは、文字のごとく傲慢であることが個性のごとくなっている人々を指す。片田珠美氏がさまざまな形で示される《傲慢症候群》を示すには人の個性は次のような特徴でまとめられる。

① 自己表現を優先する
② 過剰な自信を持つ
③ 過去の成功に依存する
④ 自分に自信がない

片田氏の解説は、主としてこれらの四つの性格が複雑に組み合わさっていることを、実例を上げながらわかりやすく述べている。《傲慢症候群》の隣にいれば大変であることは容易に想像できるが、自分がそれにかかっていないと自信をもっていえるのか、を考えさせられる。

①、②自己表現を優先させるさせない、は多分に人となりによろう。誰にでも自己主張はある。それを多数の前であらわせるのは、自分に自信が必要である。自信を持つことは、社会

（会社や職場とは限らない）で生き抜くには必須である。しかし、根拠がない（もしくは根拠に乏しい）のに自信を持ってしまう人たちがいることも確かで『こんなに根拠がないのに、何でこんなに自信を持てるのだろう？』と感じる人と接した経験はないだろうか?!　このようなヒトと会話する場に置かれると、困惑し、時には不愉快になる。とくに、自分がそのヒトの主張する事象なり経過と反する（あるいは異なる）エビデンスを持っていて、異なる事象や経過を想定している場合にはことに面倒である。どうでもいいような会話であれば何も言わなければ済む。しかし、問題解決への道筋を考える時には、モノ申さねばならない。傲慢症候群にかかっているヒトは、根拠もなく自分の意見に固執することが多く、別の根拠を認めようとしない（はなっから否定しているから認められない）。他人の意見を取り込んで咀嚼し否定するなら意見がかみ合うが、最初から認めないのだから、どうしようもない。こうしたヒトに限って、結果の責任を取らないことも多い（時には自説の主張さえ否定したりする）。こういうヒトが上司であり、決裁権を持っていると、苦労するだろう。

③過去の成功にいつまでもしがみついている人に出会うことも少なくない。著者は自分も含めて《成功の認められる期間は三年》と定めている。その三年の間に重ねた努力で次の成功を得て、次の三年に繋ぐ。過去の成功は過程として、他人に与えることもいとわない。そのようにして、成功に溺れず自己研鑽して行くべきであろう。

成功には、社会で人をリードする立ち位置にいる（上る）ことも含められよう。普通の社会では、努力を積み重ねその努力を社会が認めて、時間を掛けながらリーダーへと進む人もいれば、たまたま生まれた環境により周囲が持ち上げて、さしたる成果もないのにリードの席に座っているケースも少なくない。根拠が薄く、それでもリーダーになってしまった人がなんとなくリーダーとして威張り慣れて《傲慢症候群》にかかってしまうのにも遭遇する。リーダーはリードされる側への責任があり、それが果たされない場合には、ときにリードされる人々の人生をも狂わせてしまう。その責任を自覚してこそリーダーといえる。件の国会議員や世襲議員の多くに見られる現象でもある。直接の言動に傲慢症候群が顕われるケースもあれば、現在裏金問題で紛糾している国会議員たち（世襲議員に限らないが…）のごまかしの態度にも傲慢症候群が明らかに見て取れる。

④③で上げた、なんとなく持ち上げられたリーダーには、確たる自信がない。当然のことである（もっとも、あるはずのない自信をもっている妙な自信家もいるが…）。自信がないのに、リーダーとしての立ち位置から、自信があるように振る舞ってしまう場合、多くは下や周囲の人々に簡単に読まれてしまう。しかし読んでいても、それをダイレクトに表現できないのが下の人であり、社会の常である。そして、それゆえの被害に遭うのも、多くは下の人たちである。裏金（ごまかした金）で議員席を買って、威張り返っている国会議員が法律を作り、へつらう役人が施行し、縛られるのが国民、という絵図はいい加減にわれわれの手で終わらせないと、苦しむのはわれわれである。

吉幾三氏の指摘した国会議員は、これらの典型であろう。さて問題は、誰が選ぶのか??　今ある日本の苦境は、これまでの社会リーダー（とくに政治家）のミスリードによるものが大きい。そしてそれらを選んだのが、いまミスリードに苦しめられている人々であるのは、皮肉といえる。われわれはわれわれのために何をしているのか?!

吉幾三氏の述べた《国会議員の体たらく》から、随分飛躍して、こんなことを考えてしまった。

注１：片田珠美著（広島生まれで大阪大学医学部卒、フランス国費留学でラカン派の精神学を学ぶ。臨床精神科医）、二〇一六年朝日新聞出版発行